

魯迅文学における「自覚」試論
——竹内好の『魯迅』を中心に

陳 維

Abstract: This paper is going to illustrate the life of Takeuchi Yoshimi and the definition of "Consciousness" in Lu Xun's literature which is presented by Takeuchi, and completely analyze the possibility of its generation and development.

Keywords: Lu Xun; *A Madman's Diary*; Consciousness; Conversion; Redemption

一 はじめに

日本における魯迅の研究といえば、どうしても避け難い一人の学者はあり、彼は竹内好である。彼が1944年に、魯迅の研究専門書『魯迅』を出版したゆえに、日本における魯迅の研究という分野で創始者となった。彼は『狂人日記』の背後で、魯迅の文学を把握するための一つ重要な概念、つまり、「回心」、更にいえば「贖罪」を捉えた。「贖罪」は魯迅の文学で一貫されていて、潜在的な主題となり、一種の「自覚」となったのである。

本論文では、三点にまとめて、竹内好が言い出した魯迅の「文学の自覚」の把握を試みたい。

一、竹内好の生涯を紹介することを通して、当時代の背景を理解してみたい。

二、竹内好が言い出した「文学的な自覚」は、魯迅の一生で、いつからはじまったのか、またその内容と発展の過程を解明していきたい。

三、「文学的な自覚」の形成の過程を探求し、その形成の源を追跡していきたい。

二 竹内好の生涯

竹内好は1910年の生まれで、1977年に逝去している。彼は1934年、当時の東京帝国大学文学部支那文学科を卒業し、短期間中国を訪問した経歴の外、盧溝橋事変の後、二年間北京に留学し、やがて1943年の末、軍隊に召集され、侵略軍の文化兵として中国の湖北省に派遣された。日本の敗戦後、彼は中国の土地に足を踏み入れたことがなかった。

戦後、彼は相前後して東京の多くの著名な学府で教鞭を執っていた。そして八年間、東京都立大学の人文学部で教授として勤めていた。しかし、彼は生涯大半の精力を学院体制内部の教育の仕事ではなく、学院外の著述、翻訳、編集の仕事に力を注いだのである。竹内好が自ら「私

は学者ではない」と言ったことにも納得がいくようである。彼はそういう自身の生活様式と知識の生産様式で魯迅に接近したのである。そしてそれを原点にして、彼の思想活動を日本の社会生活としっかりと結合させ、当時日本が迎えていた重大な現実的課題の解決に参加したのである。

竹内好が思想活動に従事した主要な時期は、20世紀の30年代から60年代の末までのことである。彼の創作力のピークの期間はちょうど、その不安定な歴史の時期と重なり合っている。30年代から40年代前半は、日本が中国侵略戦争を始め、それを局部から中国大陆に広げた時期である。その時期に、竹内好は、大学時代の友人と中国文学研究会を結成し、1935年に機関誌『中国文学月報』を発刊した。その刊行物によって、古い漢学と支那学¹との区別ができ、独立した新しい学術の中国学が生まれ、漢学と支那学と、三つの勢力が並び立って、中国文学の研究を進めたのである。同時に、竹内好はその刊行物を以って、当時学術界の最高峰にいる優秀な支那学者と、妥協しない論戦をし始めた。激しい論戦で、どのように中国文学を研究対象として接近し、外国文学研究と母語の文化との関係を、いかに確定していくかなどの核心的な問題にまで迫っていた。

20世紀30年代では、日本における中国現代文学の研究は、まだ緒に就いたばかりの時期であるにもかかわらず、既に著しい成果を上げている支那学と直面することとなった。支那学の目的は、伝統的なまとまりのない漢学と異なって、「科学性」のある中国文学の研究を創立するものであった。話には根拠があるという実証的な態度で、伝統的な漢学に、無理にこじつけられた中国の典籍を新たに詳しく解釈し、小説や伝統的な演劇などに「純文学」の地位を与えた。しかも近代的な価値観の基盤をもとに、中国学の研究を外国学の学問として位置づけた。竹内好は、雑誌の創刊前後から、当時の中国の伝統的な思想について考察し紹介するのは自分の責任であると感じた。主体的な態度で支那学を研究する彼は、思想の主体性を否定する支那学者と対峙した。そのため、竹内好は始めから彼らの親密な戦友でありながら、認識の面で異なる見解を持っていた。その違った見解がもたらした学術界での孤独感は、魯迅と出会う主要な原因の一つとして現われているのである。

『中国文学月報』の出版を経験し、支那学と白兵戦をした竹内好は、思想と感情の上で魯迅と出会う準備を完成した。特別な論争の体験と孤独感を持っている彼は、魯迅文学から、無限な彩りの中国文学の世界に入った。

竹内好の代表作『魯迅』が書かれたのは、中国文学研究会が解散したのと同じ年である。『中国文学月報』の廃刊の時、前から紛らわすことができなかつた鬱積を、『魯迅』の中で十分に発散させたのである。魯迅の「掙扎」の言葉を借りて自分の心情を表した彼は、自分の全ての心血を注いで創立、発展させた中国文学研究会を、時代への彼個人の抵抗として中断させたので

¹ 「支那学」は第二次世界大戦以前の日本における中国学の旧称。

ある。だからこそ、竹内好の『魯迅』は、魯迅の生活していたその混乱の年代と魯迅が鋭い筆鋒で披露している真実の時代に最も接近していたと言えるのである。

三 魯迅文学の「自覚」の発見

魯迅の伝記を通して、魯迅には、暗く不明な時期があったということが発見できる。それは辛亥革命の翌年、1912年5月から1918年4月までで、魯迅が小説『狂人日記』を発表する前の時期なのである。その間、魯迅は北京の紹興会館に住み着き、その会館もS会館と呼ばれている。6年間の歳月を、誰も訪れることのない家で、自分の青春が消えてゆくことだけを願いながら暮らしている魯迅に、自然と疑いや好奇心が生じるのである。魯迅は長い間、古碑を写す以外、一体何を考えていたのだろうか。夏の夜、団扇を使いながら、庭に座って、「生い茂った葉越しにちらちら見える青空を眺めている」²時、彼の思想はきっと遙か遠い、奥深いところにまで行っているに違いない。この時期は、おそらく魯迅の生涯で心を静めて、思索に耽る唯一の時間だったのかもしれない。その時、魯迅は、いったい何を考えていたのか、当時の彼の日記と手紙からでも読みとれない。多くの伝記では、この時期に触れるとほぼ言い方がおおざっぱで、あるいは意を尽くさずに省略されている。と言って、この時期の魯迅には心の悩みのようなものがなかったとは言い切れない。なぜなら、「私の気がねしていることは、決して少なくないのである」³と言っているから。

いち早くも、S会館での不明な時期に注目したのが、竹内好である。彼は1944年、出版された専門の研究書『魯迅』の中で、「林語堂が「蟄伏期」と呼んだ時期」⁴は、魯迅にとって最も重要な時期とみなしている。

彼はまだ文学生活を始めていない。彼は、会館の『幽霊の出る部屋』で古文書に埋れている。外面に現れた動きは何一つない。『叫び』がまだ『叫び』となって爆発しない。それを醗酵する重苦しい沈黙が感じられるだけである。その沈黙の中で、魯迅は彼の生涯にとって決定的なもの、いわば回心と呼びうるようなものを掴んだのではないかと私は想像する。⁵

この引用文の中から、初めて「回心」⁶という言葉が出てきている。これはまた、竹内好が魯迅を論じるのに初めて使った表現である。竹内好は、「回心」という言葉を使って、内心での自

² 『魯迅文集1・呐喊自序』、竹内好訳、筑摩書房1976年

³ 『魯迅文集・墳・墳』の後に記す』、竹内好訳、筑摩書房1976年

⁴ 『魯迅』によると、作者に指摘された。

⁵ 『魯迅』、竹内好、日本評論社1944年

⁶ 回心：キリスト教で、キリストによる罪のゆるしと洗礼とによって起こる心の大きな転換をいう。また、キリスト教で、宗教的思想や態度の明らかな変化を伴った信仰の成長。(日本国語大辞典より)

己否定から自覚と覚醒に達したという意味を包含している。竹内好は「回心」という言葉を借用して、魯迅が文学の道を歩むようになったきっかけを明らかにしたのである。とりわけ見逃すことができないのは、魯迅の「回心」は、S会館での不明な時期にあったと竹内好は認識している。

その「自覚」の意味については、何度も繰り返しているようだが、竹内好は『魯迅』の中で、このように述べている。「魯迅の文学の根源は、無と称せらるべきある何者かである。その根底的な自覚を得たことが、彼を文学者たらしめているので、それなくしては、民族主義者魯迅、愛国者魯迅も畢竟言葉である。」⁷つまり、「自覚」のことを「無」と理解している。また、ほかのところで、彼の言い方は比喩的である。

彼の文章を読むと、きまってある影のようなものにぶつかる。その影は、いつも同じ場所にある。影そのものは存在しないのだが、光がそこかれ生まれ、そこへ消え入り、そのことによって存在を暗示させるようなある一点の暗黒がある。うかつに読み過せば、気づかずに済ませるが、一度気がつくとなんか気になって忘れられない。華やかな舞踏場に髑髏が踊っているように、しまいには髑髏の方が実体に思えてくる。魯迅は、そのような影を負って、一生を過した。私が彼を贖罪の文学と呼ぶのは、その意味である。⁸

この比喩的な言い方は、彼の魯迅への独特な見解であり、他人の及ぶところではないだろうと思われる。彼の話を用いてみると、彼が著作『魯迅』を通して、解決しなかった問題は、「私のやりたいことはただ一事、魯迅の位置を決めることである。思想や、作品行動や、日常生活や、美的価値でなく、それら雑多なものを可能にしているある本源の何者を知りたい」⁹ことである。即ち、魯迅文学の「自覚」を（「回心」→「贖罪」→「無」）というふうにとまとめることができると考えられる。

しかし、その本源的な、「自覚」というものは、あまりにも重視されすぎており、竹内好自身が、「魯迅にとってただ一つのを決定しようとする私の立場からは、そのことすらもはや取り立てて云う必要もないことである」¹⁰というように、その問題を用心深く迂回し、回避した。竹内好の比喩的な方式では、その「無」に完全にたどり着くのは、不可能ではないか。彼が「回心」と「贖罪」とを選んで、それらが、最もその「無」に行く近道なのかもしれないと説明した。

四、魯迅文学における「自覚」の形成過程

⁷ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

⁸ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

⁹ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

¹⁰ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

(一) S 会館の時期は「自覚」の原点ではない

竹内好の『魯迅』は、魯迅文学の「自覚」を巡って論述を展開し、「無」という究極の立場にたどり着いたと見られるのではないだろうか。しかも「贖罪」の文学によって、その究極の立場に行く可能な道も設定した上で、竹内好が『魯迅全集』で、その道にゆく入門の経路を探したと信じているわけである。それは、魯迅の文学で、みんなによく言われる処女作としての『狂人日記』だといってもよい。

竹内好は、『狂人日記』について、次のように評価を加えている。

『狂人日記』が近代文学の道を開いたのは、それによって口語が自由になったのでも、作品世界が可能になったのでもなく、まして封建思想の破砕に意味があるのでもない。この稚拙な作品によって、ある根底的な態度が据えられたことに価値があるのだと私は考える。¹¹

ここでは、いうまでもなく、自分の論理のため、適当な根拠を探し、魯迅が民国二十四年の『中国新文学大系小説二集』序』で、『狂人日記』を発表したが、その発表意図は「家族制度と礼教の弊害を曝露する」という小説の目的を一律に抹殺せざるをえなかった。その「ある根底的な態度」は、文学の「自覚」を指すに違いない。S 会館での時期は一体、「魯迅にとって、一番重要な時期である」¹²か？竹内好は、「金心異が訪ねたので、『狂人日記』が生まれたということになっている」¹³と疑っている。この疑問を解決するため、まず S 会館の時期に遡ってみたい。

われわれは『魯迅伝』の記述に基づいて、S 会館の時期の動向を容易に見つけることができる。以下のように、三点を述べてみたい。

- 一、魯迅が S 会館に入居する前に、孫文の中華民国臨時政府が発足したが、間もなく袁世凱の手に落ちたのである。
- 二、魯迅は教育部の北京への移転にともない、教育部社会教育局の第一課の課長の役に就いていた。博物館、図書館、動植物園、美術館・美術展覧会、文芸、音楽、演劇、古美術の調査を管掌している。毎日、出勤しただけで、ほとんど公務の仕事がなかった。
- 三、魯迅が役人生活を送っていた時期には、仕事の関係で書いた『美術の普及をはかる意見書』以外では、古い石碑の筆写と校訂の仕事しかしていないことがわかった。

¹¹ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

¹² 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

¹³ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

上述した歴史の事実を分析したとしても、「自覚」の形成の奇跡を探求するのは難しいかもしれない。竹内好は、魯迅がこの時期を回想して、作った『呐喊』の『自序』を読んだ時、こう言った。

「この文章は、自伝的文章の中でも比較的まとまっており、それでよく利用されているが、私にはなかなか問題が多いように思われる。」¹⁴

私が、これまで経験したことのない味気なさを感じずようになったのは、それ以後のことである。はじめ私は、何故そうであるかが分からなかった。後になって考えたことは、すべて人の主張は、賛成を得れば前進を促すし、反対されれば奮闘を促すが、ただ知らぬ人々の間で叫んで、その人々が一向反応を示さぬ場合、賛成でもなければ反対でもない場合、あたかも身を無辺際荒野に置くように、手の下しようもない。それは如何に悲しいことであろう。かくて、私は自分の感じたものを寂寞と名づけた。

この寂寞はなおも一日一日成長して、大きな毒蛇の如く、私の魂にまつわって離れなかった。¹⁵

彼が『悲哀』とか『寂寞』とかいう言葉であらわしうるようなものを感じていたこと、それは最初はなかったものであること、『一日一日成長して』いったものであること、しかし、それが形成される決定的な時機というものはあったろうということ、その決定的な時機を境としてそれが彼において自覚的になったということ、その後はその苦しみを逃れるために彼は『種々の方法を用い』たということ、これは大体彼の文章で諒解できるのである。しかし『寂寞』とか『悲哀』とか呼びうるようなもの、言い換えれば孤独の自覚は何によって彼に実現したのだろうか。¹⁶

竹内好は魯迅の文章から魯迅に対して自分のオリジナルの見解を見つけることができた。つまり、魯迅文学における「自覚」の形成は、S会館の時期から始まるのではなく、それよりもずっと前のある時期からすでに芽生え始め、S会館の時期を通して積み重ねられたということであろう。それならば、魯迅文学における「自覚」形成の原点は、いったいどこにあるのだろうか。

(二) 『摩羅詩力説』—覚醒者から指導者を目指して、「自覚」形成の原点の可能性の一—

上述したように、S会館の時期は魯迅文学における「自覚」形成の原点の時期ではなく、さまざまな要素が加えられ、積み重ねられた時期であると考えられる。伊藤虎丸は魯迅の思想発展を三段階に分けて論じている。いわば、覚醒者から指導者、贖罪者までの三段階の形成過程である。魯迅の生活及び文章の中でもそういう形成過程の痕跡は所々現れると考えられる。そ

¹⁴ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

¹⁵ 『魯迅文集・呐喊自序』、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

¹⁶ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

れ故、『狂人日記』の前の時期、つまり留学時期の魯迅は、自然とわれわれの視野に入ったのである。

『摩羅詩力説』は、魯迅が外国文学と芸術を紹介する最も早期に書かれた論文である。その中では、反抗の精神を持ったバイロン等の作家たちを褒め称えた。彼らは「いずれも剛毅不屈、あくまで真実を守り通した。大衆に媚びて旧習に随順するようなことをしなかった。雄叫びを挙げて、その国民に生气を吹きこんで、起ち上がらせ、その国威を世界に輝かせた。」¹⁷と、被抑圧民族と人民が自由を戦い取り、解放を求める願いを強烈に反映している。その文章では、「久しく古い祖先の光栄のお陰で、周囲の劣った国よりも一頭ぬきんでいたことのあるものは、凋落の兆しの起っていることも知らず、自己を過信して愚昧であり、水の澱んだ湖のように汚い」¹⁸中国でも、こういう「精神界の戦士」が出てくることは望ましいことであり、「人々は、『実利』という二字を心にきざみつけていないものはなく、それが得られない間はせっせと働くが、得てしまうと寝てしまう。……しかも利欲のためには、どういう陋劣なことでもやるようになったとすれば、だんだんと卑怯で吝嗇で、退嬰的で、恐怖心の強い人間となり、古代人の素朴さを失って、人情紙よりも薄き末世的症状を呈するに至る」¹⁹国民を覚醒させたかったのである。同時に、中国では、「第二回目の維新」を望んでおり、「その国民に警告し、自由を鼓吹し、圧制者を攻撃した」²⁰当時の暗黒な反動政権を打倒し、世界の諸国に遅れている状況を変えようとしたのである。

この文章からみると、「精神界の戦士」つまり「超人」が、「臂を振るって一たび呼びかけ」²¹れば、今は眠っている「素朴の民」はその「心の声」によって心を動かされて立ち上がり付き従うはずだというのが、当時の彼が描いていた楽観的な革命のイメージであり、自分をもこうした戦士になろうという気持ちを持ち始めたためだろうと思われる。

魯迅が、「思うに、祖国の真価を顕揚するには、まず己れを知ることが第一であるが、また同時に必ず人を知らなければならない。十分に比較することによって、はじめて自覚が生ずる。自覚の声が起れば、その響きは、尋常の響きとちがって、非常に大きく清らかであるから、その一つ一つが必ず人の心を撃つのである」²²と言って、「己れを知ること」で、彼が、必ず「自身はどうしても人の先頭に立っていなければならないが、人が民衆の後になることに対しては

17 『魯迅選集・墳・摩羅詩力説』、松枝茂夫訳、岩波書店 1956 年

18 『魯迅選集・墳・摩羅詩力説』、松枝茂夫訳、岩波書店 1956 年

19 『魯迅選集・墳・摩羅詩力説』、松枝茂夫訳、岩波書店 1956 年

20 『魯迅選集・墳・摩羅詩力説』、松枝茂夫訳、岩波書店 1956 年

21 『魯迅選集・墳・摩羅詩力説』、松枝茂夫訳、岩波書店 1956 年

22 『魯迅選集・墳・摩羅詩力説』、松枝茂夫訳、岩波書店 1956 年

非常に憤慨した。」²³ここで、はじめて覚醒者から指導者に転換した第一回目の「自覚」が成立するのである。

この論文を通して、魯迅の頭の中に形成された革命のイメージは、上から下への革命のイメージから下から上への革命のイメージに変えた。彼はすでに上の腐りきった政府を打ち倒したとしても、ただ武力で皇帝を追い払っただけではっきりと認識していた。それは、「ただ武力を恃みにして人の自由を蹂躪するのは、愛国といっても、それはたかが獣の愛にすぎない。」²⁴中国を強い国にする唯一の方法は、国民性の改革にほかならない。つまり、下から上までの革命の道を進まなければならない。その国民性の改革については、日本留学時代の魯迅に関わるのである。ここで、魯迅文学における「自覚」形成のもう一つの原点が窺えるのである。

(三)「藤野先生」、指導者の積極性の減少と「真の人間」²⁵との直面、「自覚」形成の原点の可能性の二

『藤野先生』の作品は、魯迅の『朝花夕拾』に収録されている。魯迅において、日本留学の時代を追憶するための記録は、極めて少ない。『藤野先生』は唯一、日本留学時代を振り返る作品である。『藤野先生』が書かれたのは、日本から帰ってきて二十年経った後のことである。『藤野先生』という作品は、魯迅文学が「自覚」に辿り着こうとする重要な一篇になる作品である。その文章が伝わってきたのは、医学を止めて、文学に転ずるという原因だけではなくて、そこには、「自覚」の秘密が秘められているが、それとは一体どのようなものなのだろうか。

第一、この散文での、ある一つの場面はよく知られている。

第二学年では細菌学の授業があつて、細菌の形態はすべて幻灯で映して見せるが、授業が一段落してもまだ放課にならぬとニュースを放映してみせた。むろん日本がロシアとの戦争で勝った場面ばかりだ。ところがスクリーンに、ひょっこり中国人が登場した。ロシア軍のスパイとして日本軍に捕らえられ、銃殺される場面である。それを取りまいて見物している群衆も中国人だった。もうひとり、教室には私がいる。

「万歳！」万雷の拍手と歓声だ。

いつも歓声はスライド一枚ごとにあがるが、私としては、このときの歓声ほど耳にこたえたものはなかった。のちに中国に帰ってから、囚人が銃殺されるのをのんびり見物している人々がきまって酔ったように喝采するのを見た---ああ、施す手なし！だがこの時この場所で私の考えは変わった。²⁶

²³ 『魯迅選集・墳・摩羅詩力説』、松枝茂夫訳、岩波書店 1956 年

²⁴ 『魯迅選集・墳・摩羅詩力説』、松枝茂夫訳、岩波書店 1956 年

²⁵ 『魯迅文集・狂人日記』、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

²⁶ 『魯迅文集・藤野先生』、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

魯迅の作品の中で、同じ場面を繰り返し描いたのは極めて珍しい。その繰り返し場面について、竹内好は、「それが彼の文学的自覚に何らかの影を投げかけていることは疑い得まい」²⁷と考えている。「そのときその場」について、西洋文明をうまく受け入れた日本の学生たちと、西洋文明に接触しようと奮い立って努力している中国からの留学生は、また、刀をもって、犯人を殺す日本の軍人とロシア軍のスパイとして日本軍に捕らえられ、銃殺される中国人と、見せしめを見物に来て、屈強な体格で、薄ぼんやりした表情を浮かべていた中国の民衆との間では、ある意味で、両方の対立が成立したのではないかと私は考える。むろん、その場面では、日本人の学生たちが注目したのは、言うまでもなく、中国人の囚人を殺そうとする日本を代表する日本の軍人に違いない。だが、魯迅が注目したのは、その銃殺される中国人の囚人ではなくて、その薄ぼんやりして、殺される同胞を見物している群衆なのである。すでに覚醒した魯迅が、自分の国は決して弱国ではないという意識を払おうとしても、先進国としての日本から見れば、魯迅もその遅れた国の一員だと思われるに違いない。「『万歳！』万雷の拍手と歓声だ。」その拍手と歓声は、ただ殺される同胞と見物している民衆のみではなく、時間と空間を越えて、教室にいる魯迅に向けての嘲笑と侮辱なのである。それでさえ、「彼は幻灯の画面に、同胞のみじめさを見ただけでなく、そのみじめさにおいて彼自身をも見たのである」²⁸と竹内好が言った。それと同時に、生まれた屈辱感はその瞬間、ピークに達したのである。「彼は、同胞の精神的貧困を文学で救済するなどという景気のいい志望を抱いて仙台を去ったのではない。恐らく屈辱を嚙むようにして彼は仙台を後にした」²⁹と竹内好は考えている。

屈辱を感じたことは、幻灯事件の前にもまだ一つの事件がある。その事件は、「藤野先生」では、書かれているが、『呐喊』自序には書かれなかった。それは、藤野先生に彼のノートを直してもらったことから、一部の同級生は試験問題を漏らしてもらったのではないかと邪推し、いやがらせをする事件である。その事件は、間もなく同級生たちの誤解であることが証明されて解決した。その後で、魯迅は次のように書いている。

中国は弱国である。従って中国人は当然低能児である。点数が六十以上あるのは自分の力ではない。彼らがこう疑ったのも不思議でないかもしれぬ。³⁰

この言葉のニュアンスは、文字の表面からだけ伝わってくる穏やかなものであっただろうか。このような肯定的なニュアンスの背後には、限りない屈辱を受けた後の悲憤の目に見えない暗流が隠されているかもしれないのだ。「幻灯事件が彼に与えたものは、いやがらせ事件と同じ性質の屈辱感であったと思う。屈辱は、何よりも彼自身の屈辱であった。同胞を憐れむよりも、

²⁷ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

²⁸ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

²⁹ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

³⁰ 『魯迅文集・藤野先生』、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

同胞を憐まねばならぬ彼自身を憐れんだのである。幻灯事件が彼の文学志望と関係があるとすれば、そしてそれは確かに関係のないことではないが、幻灯事件そのものが、彼の回心を意味するのではなく、彼の得た屈辱感が、彼の回心の軸を形成するさまざまな要素の一つに加わったろうということである³¹と竹内好が述べた。

もし、「摩羅詩力説」は、はじめて西洋文明を受け入れた覚醒者からその理論を用いて、自分の国でも革命しようとする指導者に転換するという道里程標の文章であると云えば、「藤野先生」は、「狂人日記」で指導者として登場した「狂人」が、改革の積極性がすり減って、自分も「人を食う」国民の一員に変転するという過程を証明する文章である。この文章は、魯迅の潜在意識では、こういう萌芽を残させたのである。

第二、「藤野先生」の中心人物は、云うまでもなく、田舎で勤めている医者 of 藤野巖九郎である。普通「藤野先生」という作品は、魯迅が医学をやめて文学に転ずるきっかけを説明する際によく用いられる作品であって、藤野先生その人物についてはあまり注目されていない。しかし、藤野先生その人物が作品の中での役割については、絶対無視してはいけないところだと思う。その点に早く気づいた人には竹内好がいる。

「彼は、この藤野先生には並ならぬ愛情を感じているようである。……『朝花夕拾』の中で愛情を持って追憶されている少数の人の一人で、ほとんど象徴的とさえ感じられる。」³²この話は私の注意を払わせた。また竹内好のほかの話と関わりがあるのか? 「魯迅の根底にあるものは、ある何者かに対する贖罪の気持ちでなかったかと私は想像する。何者に対してであるかは、魯迅もはっきりとは意識しなかったろう。ただ彼は、深夜に時として、その何者かの影と対座しただけである。」³³この人とは藤野先生であろうか?

『藤野先生』の終わりに、こう書いてある。「ただ彼の写真だけは、今(民国十五年)もなお北京のわが寓居の東壁に、机に面して懸けられている。夜ごと、仕事に倦んで怠けたいとき、仰いで灯の中に、彼の黒い、痩せた、今にもぼつりぼつり話し出しそうな相貌に目をやると、私はたちまちまた良心を発し、のみならず勇気を加えられる。そこで煙草に一本火をつけ、再び『正人君子』の流に憎まれる文字を書き続けるのである。」³⁴仮に「摩羅詩力説」を書いたときの魯迅は、ただ西洋の本では、危険にさらされた国を救う「精神界の戦士」を探したのだとすれば、藤野先生は、実体化された「精神界の戦士」として、魯迅の前に現れたのではないかと私は考える。

試験問題を漏らした事件では、「私はそのことを藤野先生に知らせた。」その後で、必ず藤野先生の反応と対策を書くのは当たり前で、無礼な学生を叱るかもしれないが、また、第二学年

³¹ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

³² 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

³³ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

³⁴ 『魯迅文集・藤野先生』、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

で、細菌学の授業では、教える先生は藤野先生であるかどうかははっきり言わなかった。そこには、魯迅は事実を隠したかもしれない。文章では、わざと藤野先生を独立した人格をもつ人物に描き出したのではないかと私は考える。もしその授業を教えた人は、藤野先生であれば、幻灯を映してみせる行為は、どうしても独立した人格をもつ人に相応しくない。魯迅は最初から、武力でほかの国を征服することには、それは獣の愛国にすぎないとして反対した。そうであるならば、藤野先生は、魯迅の理想的な偉大な人格をもつ人にもなれないに違いない。もちろん、彼は弱国の留学生をいじめる学生たちの立場に立たない。その事件を通して、魯迅は、現実化されたバイロンのような「真の人間」に出会ったのだ。

(四)「范愛農」——贖罪者の誕生、魯迅の文学の「自覚」形成の可能性の原点の三

S 会館の時期に、ある見逃せない出来事がある。それは友人の范愛農の死である。『彷徨』時期の作品の中には范愛農のイメージが何度も出てくる。また「范愛農」という散文もある。魯迅にはこれほど忘れ難い人は彼にはほかにない。なぜ魯迅がそんなに気にかけていたのだろうか。

その「范愛農」には、東京時代の二つのエピソードが書かれている。一つは、革命派留学生の集会で、范愛農が誰をも軽蔑し、魯迅の意見にいちいち反対したという話である。もう一つは、范愛農たちがはじめて日本に留学して来た時、先に来ていた魯迅が出迎えにいて、彼らの無神経さと田舎ぶりに思わずに首を振ったという話である。先に東京で近代に触れていた魯迅が、遅れている中国人を軽蔑し、苛立っていることが語られている。だが、「言うも恥ずかしいことながら」その一行の中には、後に革命に献身し、革命の烈士になったというのである。

それは一言でいえば、魯迅の中にあつたエリート意識、あるいは指導者意識である。しかし、その後、魯迅が、過去の自分のそういう意識を強く反省したということであろう。范愛農は、最後に魯迅が彼の仕事の依頼に答えられないうちに水死した。魯迅は最後まで、彼が自殺したかと疑っている。

魯迅は、確かに彼に特別な感情を持ち、彼が亡くなった後、詩を一首作って悼んだ。そこには、魯迅が指導者から贖罪者までのある転換を見られるのではないかと私は思う。

(五)『新生』の失敗及び辛亥革命からの経験と教訓、魯迅の文学の「自覚」形成の原点の四

医学をやめて文学に転じた後、「中国文明にとっては全く異質な西洋文明の「内質」を中国人につきつけることを目的としていた」魯迅は、『新生』の計画に情熱を傾けた。

『新生』の出版期日がせまったが、まず原稿を引き受けていた数人が姿をくらました。ついで資本も逃げてしまった。あとには文なしの三人だけが残された。はじめから時勢にそぐわぬ計画、失敗したとて人に文句をつける筋ではない。しかもその後は、この三人もそれぞれに運命が分かれて、共に未来のよき夢を語りあうこともできなくなった。これが

われわれの『新生』流産の顛末である。」³⁵

その後、魯迅がよく言った「寂寞」が生まれた。『新生』の流産について、竹内好は明らかに表面上の意味のままでは、受け取らなかった。「『新生』事件が追憶すべきものに変ずるのである。魯迅の得た自覚は何であったか。私はそれを、もし私なりの言葉で強いて言い現せば、政治との対決によって得た文学の自覚であると考える。」³⁶

彼はまた周作人の話を引用して、「魯迅と梁啓超との間には、決定的な対立が」³⁷あると説明した。当時、梁啓超は自らの「政治小説論」を通して、「これによって政治小説への輿論を高めはした。」³⁸だが、魯迅は、「読んだ当座はたしかに大きな影響があった。尤も、後には小説の性質と種類に関して多少見解が変わって来、概して科学あるいは政治的小説から次第に純粹の文芸作品の方に転向していったが」(周作人)。その「小説の性質と種類」とは、「小説と群治の関係を論ず」に挙げてある「理想派小説」と「写実派小説」の区別、および「体用」説とそれから導かれる功用論を指すものであろう。」³⁹

梁啓超との対立について、竹内好は次のように述べている。

東京時代から、生涯を通じて素質的には政治と無縁であった。

魯迅の文学は、現われとしてはいちじるしく政治的であり、彼が現代中国の代表的文学者であると称されるのもその意味においてであるが、その政治性は、政治を拒否することによって与えられた政治性である。⁴⁰

また、「名声に対する無欲」と「無数の筆名」と「文壇的党派を樹てたことさえなかった」ことを例に挙げて、彼が政治と対立したものであるということを証明した。そして、一章を用いて、政治と文学をめぐって、論じたのであるが。今は、辛亥革命の話に触れざるを得ない。

辛亥革命の成果が袁世凱に奪われたことは、魯迅にとって痛恨の至りであった。後に彼が激越な言葉で「水に落ちた犬は打たねばならぬ」⁴¹などと主張したのは、この時のことが忘れられなかったからだろう。彼は革命の先駆者たちの「善意」で、「水に落ちた犬」を打たなかったため、「彼らは這い上がって来て、国民二年の後半まで潜伏していて、第二革命の時、突然とび出して来て袁世凱に加担し、多くの革命党を噛み殺した。こうして中国はまた一日と暗黒に沈み

³⁵ 『魯迅文集・呐喊自序』、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

³⁶ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

³⁷ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

³⁸ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

³⁹ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

⁴⁰ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

⁴¹ 「魯迅文集・墳・フェアプレイは時期尚早であること」、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

こみ、今日にまで到っている」⁴²と言っている。魯迅は多くの文章で、この時の革命の失敗について、繰り返し書いている。

辛亥革命を通して、永遠の革命者を見つけたと竹内好が言っている。その人は、孫文である。

「彼は孫文において真の「革命者」を見たのである。真の革命者とは何か。死に臨んで「革命なお未だ成功せず」と叫んだ人がそれである。革命なお未だ成功せず。辛亥革命は革命ではない。第二、第三革命も革命ではない。何故か。「革命には止境がない」からである。真の革命は「永遠の革命」である。「永遠の革命」を自覚したものだけが真の革命者である。」⁴³

また、「孫文に「永遠の革命者」を見た魯迅は、「永遠の革命者」に自己を見たのである。」「彼は文壇に、自己を含めての文壇に「戦士」なしと見たのである。」⁴⁴それで、永遠の革命者を借りて、魯迅自身が、孫文と対立している立場に立って、「『革命』とは広義に云えば、政治ということである」⁴⁵と述べ、文学と政治の対立だと竹内好が証明したのである。また魯迅は、「私は、臂を振って叫べば呼応するもの雲の如しといった英雄ではないのだ」⁴⁶と認めている。

『新生』事件と辛亥革命の挫折で、魯迅が指導者の高い位置から下りてきたが、それは、彼の文学の原点になっているといってもよいだろう。

五、おわりに

本論文は、日本における魯迅の研究専門家一竹内好の専門書『魯迅』を分析することを通して、以下の結論に達した。

一、竹内好が魯迅と接近したのは、当時の時代的背景と密接な関係があると考えられる。混沌とした20世紀の初めに、竹内好は『中国文学月報』を創刊したことを通して、魯迅のその時代への「反抗」というものを体験したとも言えるだろう。

二、竹内好は『魯迅』の中で、『狂人日記』から魯迅の文学を形容する3つの言葉、つまり「無」、「回心」、「贖罪」を発見した。しかし、彼は、一体どの部分から読んだかを直接に答えなかった。ただ『狂人日記』と『野草』などの何篇かに隠されていることを述べたにすぎない。

三、竹内好は魯迅の思想の変化については、少しも興味を持たず、彼は魯迅の文学で不変なもの、根本なものを知りたかった。

四、竹内好は『狂人日記』の後、「贖罪」の意識があるからこそ、魯迅に自覚させ始めており、このような「自覚」は彼の一生を貫いていた。竹内好は魯迅の文学の本源が発生した時期は S 会館の時期であろうと考えている。

⁴² 「魯迅文集・墳・フェアプレイは時期尚早であること」、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

⁴³ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

⁴⁴ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

⁴⁵ 『魯迅』、竹内好、日本評論社 1944 年

⁴⁶ 『魯迅文集・1 卷・呐喊自序』、竹内好訳、筑摩書房 1976 年

五、本論文の作者は、『魯迅』についての分析を通して、S会館の時期は恐らく「自覚」形成の原点ではなく、その前の時期だとの考えである。そこについては、四部分に分けることができる。一、『摩羅詩力説』を書いた魯迅は、覚醒者から指導者へという最初の変化といえるだろう。二、留学時期に書かれた『藤野先生』は、指導者の積極性の減少と「真の人間」との初対面だと考える。三、そして「范愛農」は魯迅にとって贖罪者としての誕生だと思われる。四、『新生』の失敗及び辛亥革命からの経験と教訓は、魯迅に自分が決して孫文のような「永遠の革命者」という指導的な英雄ではないことを自覚させることとなった。

要するに、本論文を通して、竹内好が言い出した魯迅の文学における「自覚」の源、発生の時期、及びその形成の過程について全面的に整理と分析を行ったものである。

参考文献

- 1 『魯迅』、竹内好、日本評論社1944年
- 2 『魯迅文集』、竹内好訳、筑摩書房1978年
- 3 『魯迅選集』、竹内好等訳、岩波書店1956年
- 4 『竹内好という問い』、孫歌、岩波書店2005年
- 5 『魯迅與竹内好』、薛毅、上海書店出版社2008年
- 6 『竹内好的研究』、靳叢林、北京大學出版社2012年
- 7 『從“絕望”開始』、靳叢林、三聯書店2013年